

序 文

大野 重昭*

はじめに

医学における古くて新しい課題は、やはり何といても「感染症の克服」である。生物がこの地球上に誕生し、さらに人類が誕生して以来、感染症との壮絶な戦いは絶えることがなく、現在でも限りなく継続されている。

20 世紀後半のある時期には、人類は一瞬「感染症を克服した」かのような錯覚に陥った時期があった。しかし、現実にはエイズの出現や病原性大腸菌感染の大流行によって、これらの空想はあっという間に瓦解してしまった。結局、感染症の克服はいかに大変な永遠の命題であるのかを改めて思い知らされる結果となった。

過去の眼科学の歴史を振り返ってみると、20 世紀におけるホワイタイ診療の進歩はまことにめざましいものであった。特に眼科手術をはじめとする眼外科領域の 20 世紀における進歩、発展は、後世の歴史に残るものであろう。しかし、現在でも眼感染症対策の重要性は相変わらず大きいものがあり、感染予防や術後感染治療の社会的ニーズはむしろ以前よりいっそう高まったといえるかもしれない。

感染症変遷の 3 要素

感染症対策を考える場合、感染症の変遷に関与する 3 つの大きな要素を考えておく必要がある。その第 1 番目は病原体そのものの変化である。また、第 2 番目には感染を受ける個体側の変化である。そして、第 3 番目には地球環境の変化が挙げられる。

1. 病原体の変化

感染源となる病原微生物も、当然のことながら生き延びていく宿命を負わされている。このためには厳しい生存競争に打ち勝って、臨機応変に子孫を残さなければならない。個体の免疫応答や治療に用いられる抗菌薬に対抗して、遺伝学的な変異を繰り返しながら生き残る方策は並大抵のことではない。病原微生物は常に変異し続けており、昨日と今日では同じ病原体でもその遺伝子型は

* おおの・しげあき：北海道大学大学院医学研究科病態制御学専攻感覚器病学講座視覚器病学分野

異なっている可能性を常に考えておく必要がある。

2. 個体側の変化

ご高齢の方が口にする「今の若い者は宇宙人だ。何を考えているやらさっぱり理解できない」という事実は、何も思考法や価値観の違いだけにはとどまらない。感染既往歴や個体の免疫能が時代とともに確かに変化しているのである。母体の子宮内にいるときからして、すでに感染免疫状態は年々変化している。そのうえ、アトピー疾患の著増や高齢者の増加によって、感染症患者のプロファイルは大きく変化しつつある。21世紀の眼感染症診療においては、現在の患者個体側の変遷を十分に把握する必要がある。

3. 地球環境の変化

先進国の生活環境は見事なまでに整備され、上水道や下水道の普及、改善は古典的な感染症の著明な減少に大きく貢献した。しかし、幼小児期に種々の病原体に接する機会が減り、より重篤な小児ウイルス感染症に罹患する成人例がかえって急増している。あるいは発展途上国への海外旅行や海外駐在時に、重篤な感染症に罹患する症例もみられる。また、交通手段のグローバル化により、航空機や旅行者を介して、ある種の感染症があつという間に世界規模で流行する事実もある。

地球環境の変化、あるいは国や地域による経済格差が、感染症の変遷にも大きな影響を与えている事実を見逃してはならない。

眼感染症の診療

眼感染症は眼球や眼球附属器という、解剖学的に限局された微細な視覚器の感染症である。他の臓器、組織の感染症診療とはずいぶん異なった特殊な領域である。したがって、われわれ眼科医はその特殊性を十分に理解し、眼感染症に特有な予防法、診断法を習得するとともに、眼感染症の治療に最善の努力をすることが大切である。

本増刊号の「眼感染症診療ガイド」が日常診療の一助になれば、種々のご苦勞をいただいた著者、編集者一同の望外の喜びである。